

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530794

研究課題名(和文)ステレオタイプ抑制による逆説的效果を低減するための代替思考に関する研究

研究課題名(英文)Effective replacement thoughts in reducing the paradoxical effects of stereotype suppression

研究代表者

岡 隆(OKA, Takashi)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：80203959

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：ステレオタイプの抑制の逆説的效果を低減させる可能性のある代替思考を探索するために6つの実験を実施し、代替思考として反ステレオタイプが使用されると、抑制の逆説的效果が促進するということが、代替思考としてサブタイプ(非優位ステレオタイプ)が使用されると、抑制の逆説的效果が低減するということが、認知的複雑性が高い人は、サブタイプ(非優位ステレオタイプ)の利用可能性が高く、ステレオタイプを抑制するさいに、サブタイプ(非優位ステレオタイプ)が代替思考として使用されやすく、その結果として、抑制の逆説的效果を生じさせにくいということが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Six experiments explored the effective replacement thoughts in reducing the paradoxical effects of stereotype suppression. Our findings were as follows: (a) Counter-stereotypes were ineffective in reducing the paradoxical effects; (b) subtypes (i.e., non-dominant stereotypes) were effective in reducing the paradoxical effects. (c) those who had complex cognitive structures in person perception were likely to use subtypes as replacement thoughts, and thus showed less paradoxical effects than those who had simple cognitive structures.

研究分野：社会科学

キーワード：ステレオタイプ 偏見 抑制 逆説的效果 サブタイプ 認知的複雑性

1. 研究開始当初の背景

(1)人びとは、ある人物に接したとき、その人物の所属する社会的カテゴリーに基づいてその人を判断してしまう。このようなステレオタイプの判断は自動的に活性化されてしまうが、人びとはステレオタイプの判断を行わないように、ステレオタイプを意識的に抑制しようとすることがある。しかし、抑制という意識的な努力を行うと、その後かえってステレオタイプの判断を強く表出してしまうことが知られている。これは、人びとがバイアスのない正確な対人判断を行おうと努力したにもかかわらず、皮肉なことにかえって対人判断バイアスを増加させてしまうという逆説的效果として知られている。

(2)一般的な思考の意識的な抑制に関する先行研究では、抑制のさいに特定の代替思考が利用されることで逆説的效果が低減されることが示されている。しかし、ステレオタイプの抑制に関する研究では、ステレオタイプを抑制するさいに、人びとのなかでどのような思考が生じているかは扱われてこなかった。本研究では、一般的な思考の抑制と同じように、ステレオタイプの抑制においても、何らかの代替思考が逆説的效果の低減や解消に効果的であると考え、その可能性を検討することとした。

(3)ステレオタイプを抑制するさいに、ステレオタイプと全く関係のない内容を代替思考として利用すると、逆説的效果が低減するどころか、むしろ増加する可能性を示唆する研究がある(Oe & Oka, 2003)。そこで、本研究では、特定の社会的集団についてステレオタイプが問題となるとき、その社会的集団に密接に関連した内容の代替思考ならば、逆説的效果の低減・解消に有効であると予想した。この予想についての実証的な研究はこれまでになされていない。

(4)これまでの典型的な思考抑制研究でも、ステレオタイプ抑制研究でも、代替思考の内容は、実験者による直接的な教示によって操作されており、特定の代替思考を生じさせやすくするような社会心理学的要因については検討されていない。代替思考を扱う研究の生態学的妥当性の確認のためには、現実の社会心理学的要因の検討が必要と考え、個人差要因、集団関係要因を検討することとした。

2. 研究の目的

(1)本研究では、ある社会的集団のステレオタイプを抑制するさいに、そのステレオタイプに密接に関連した代替思考として、その社会的集団のサブタイプ(非典型的メンバー、サブカテゴリーのステレオタイプ、非優位ステレオタイプ)に着目し、サブタイプが代替思考として利用されると、抑制の逆説的效果が低減・解消する可能性を、以下の(2)から

(4)を目的として検討する。

(2)ある集団のステレオタイプを抑制するとき、その集団のサブタイプが代替思考として利用されると、ステレオタイプ抑制に伴う逆説的效果が低減・解消できるかどうかを明らかにする。なお、サブタイプの利用可能性は、プライミングによって操作する。

(3)認知的複雑性が高い人びとほど、偏見が弱く、また、ステレオタイプの判断を回避できることが示されている。そこで、ステレオタイプを抑制するさいに、認知的複雑性が高い人びとでは、サブタイプが代替思考として利用されており、その結果として、逆説的效果が低減・解消されているのかどうかを明らかにする。

(4)共同作業は、相手への注意、個人化した接触を促進するため、ステレオタイプの判断が低減することが示されている。そこで、協力的な関係性のもとでステレオタイプが抑制されるさいには、代替思考としてサブタイプが利用されやすくなっており、その結果として、逆説的效果が低減・解消されているのかどうかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)研究1：特定の集団のステレオタイプを意識的に抑制するさいに、その集団に密接に関連した内容の代替思考として、その集団の反ステレオタイプが、逆説的效果の低減・解消に効果的かどうかを検討するため、92人の大学生を実験参加者として、弁護士ステレオタイプについて、その反ステレオタイプの活性化の有無と、弁護士ステレオタイプ抑制の有無を独立変数として操作し、仮想の弁護士に対するステレオタイプの判断を従属変数とする実験を実施した。

(2)研究2：研究1と同様の状況の代替思考として、その集団のサブタイプ(非優位ステレオタイプ)が、逆説的效果の低減・解消に効果的かどうかを検討するため、318人の大学生を実験参加者として、女性について活性化させる思考の種類(サブタイプ活性化、ステレオタイプ活性化、活性化なし)と、女性ステレオタイプの抑制の有無を独立変数として操作し、女性に対するステレオタイプの判断を従属変数とする実験を実施した。

(3)研究3：ステレオタイプの抑制の有無によって、代替思考としてステレオタイプとサブタイプ(非優位ステレオタイプ)の利用可能性と、ステレオタイプの判断の強度との関係に違いがあるかどうかを検討するために、122人の大学生を調査対象として、最初に、女性ステレオタイプと女性サブタイプの利用可能性を測定したうえで、女性ステレオタイプの有無を独立変数として操作し、仮想の

女性に対するステレオタイプの判断を従属変数として測定した。

(4)研究4：サブタイプ(非優位ステレオタイプ)の利用可能性が、対人認知のさいの認知的複雑性と関連しているかどうかを検討するために、129人の大学生を調査対象として、認知的複雑性を測定するためにRepテストを実施し、さらに、女性ステレオタイプと女性サブタイプを測定した。

(5)研究5：認知的複雑性が低い人は、認知的複雑性が高い人よりも、ステレオタイプ抑制の逆説的效果を生じさせやすいかどうかを検討するために、184人の大学生を実験参加者として、女性ステレオタイプの抑制の有無を独立変数として、仮想の女性に対するステレオタイプの判断を従属変数とする実験を実施した。この実験の終了後に、Repテストを用いて実験参加者の認知的複雑性も測定した。

(6)研究6：研究5の概念的追試を実施することを目的として、49人の大学生を実験参加者として、認知的複雑性の高低とステレオタイプ抑制の有無と語彙判断課題の単語の種類(女性ステレオタイプ関連語、無関連語)を独立変数とし、語彙判断課題の反応潜時を従属変数とする実験を実施した。49人の実験参加者は、Repテストに回答した428人のうち個別実験への参加意向を示した191人について、その認知的複雑性得点を中央値分割し、それぞれの群から無作為に選んだ。

4. 研究成果

(1)研究1：実験参加者が、弁護士ステレオタイプの抑制を行わなかったときには、反ステレオタイプの活性化の有無によってステレオタイプの判断の差はなかったが、その抑制を行ったときには、反ステレオタイプ活性化条件のほうが、活性化なし条件よりも、ステレオタイプの判断が促進することが分かった。このことは、ステレオタイプ抑制のさいに代替思考として反ステレオタイプが使用されると、ステレオタイプ抑制の逆説的效果が促進することを示唆している。

(2)研究2：女性の実験参加者については顕著な効果は認められなかったが、男性の実験参加者に限定して分析を施すと、思考の活性化を行わなかった統制条件では、女性ステレオタイプの抑制を行った条件のほうが、それを行わなかった条件よりも、ステレオタイプの判断が促進した(逆説的效果が確認された)が、サブタイプの活性化を行った条件では、女性ステレオタイプの抑制の有無によってステレオタイプの判断の差が認められなかった。このことは、男性の実験参加者に限定されているが、女性ステレオタイプの抑制のさいに代替思考としてサブタイプ(非優位

ステレオタイプ)が使用されると、ステレオタイプ抑制の逆説的效果が低減することを示唆している。

(3)研究3：ステレオタイプ抑制の有無とステレオタイプの利用可能性とサブタイプの利用可能性を独立変数とし、ステレオタイプの判断を従属変数とする重回帰分析を実施したところ、ステレオタイプを抑制すると、ステレオタイプの判断が促進し、ステレオタイプの利用可能性が高いとステレオタイプの判断が促進するが、サブタイプの利用可能性が高いとステレオタイプの判断が減少することが分かった。このことは、サブタイプ(非優位ステレオタイプ)が思考のなかで利用可能であれば、ステレオタイプを抑制するさいに、そのサブタイプが代替思考として使用されて、その結果として、ステレオタイプ抑制の逆説的效果が低減することを示唆している。

(4)研究4：男性の調査対象者に限定されていたが、認知的複雑性が高い個人ほど、女性サブタイプ(非優位ステレオタイプ)の利用可能性が高いことが分かった。このことは、認知的複雑性という個人特性が、サブタイプの利用可能性を規定していることを示唆している。

(5)研究5：認知的複雑性が高い人では、ステレオタイプ抑制の有無によってステレオタイプの判断の差は認められなかったが、認知的複雑性が低い人では、ステレオタイプ抑制あり条件のほうが、ステレオタイプ抑制なし条件よりも、ステレオタイプの判断を促進することが分かった。このことは、認知的複雑性が低い人のほうが、その高い人よりも、ステレオタイプ抑制の逆説的效果を生じさせやすいことを示唆している。

(6)研究6：認知的複雑性が高い人では、ステレオタイプ抑制によってステレオタイプ関連語に対する反応潜時に差は認められなかったが、認知的複雑性が低い人では、ステレオタイプ抑制あり条件のほうが、ステレオタイプ抑制なし条件よりも、ステレオタイプ関連語に対する反応潜時が短いことが分かった。このことは、認知的複雑性が低い人のほうが、それが高い人よりも、ステレオタイプを抑制すると、ステレオタイプに対する接近可能性が促進することを示している。

(7)成果の総括：以上の6つの研究を総括すると、ステレオタイプを意識的に抑制するさいに、代替思考として反ステレオタイプが使用されると、抑制の逆説的效果が促進するということが、そのさいに、代替思考としてサブタイプ(非優位ステレオタイプ)が使用されると、抑制の逆説的效果が低減するということが、認知的複雑性が高い人は、サブタ

イブ(非優位ステレオタイプ)の利用可能性が高く、ステレオタイプを意識的に抑制するさいに、サブタイプ(非優位ステレオタイプ)が代替思考として使用されやすく、その結果として、抑制の逆説的效果を生じさせにくいということが示唆された。これらの研究の限界として、とくに に関して、実際にサブタイプが利用されていたかどうかを検討されていないという点をあげることはできる。しかし、ステレオタイプを抑制するさいの代替思考の種類によって、ステレオタイプ抑制の逆説的效果が増減するという知見、および、異なる代替思考を生じさせる個人差要因によって、抑制の逆説的效果が規定されているという知見には重要な意義があると考えられる。

<引用文献>

Oe, T., & Oka, T. (2003) Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for stereotype suppression. In *Progress in Asian Social Psychology: Conceptual and empirical contributions*, Praeger. (pp.233-246.)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

山本真菜・岡隆、認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的效果との関係、*日本大学心理学研究*、査読有、36巻、2015、8-15

川久保美菜・岡隆、集団間代理報復に対する内集団同一化と外集団実体性の効果、*日本大学心理学研究*、査読有、35巻、2014、21-30

山本真菜・岡隆、ジェンダーステレオタイプ抑制におけるサブタイプ活性化の役割、*日本大学心理学研究*、査読有、35巻、2014、11-20

大島健太郎・岡隆、思考抑制時の逆説的效果について:抑制対象と代替思考の感情価の効果、*日本大学心理学研究*、査読有、34巻、2013、11-20

山本真菜・岡隆、サブタイプの確立度とステレオタイプ抑制による逆説的效果との関係、*日本大学心理学研究*、査読有、34巻、2013、1-9

Kimura, A., Wada, Y., Asakawa, A., Masuda, T., Goto, S., Dan, I., & Oka, T., Dish influences implicit gender-based food stereotypes among young Japanese adults, *Appetite*, 査読有, 58巻, 2012, 940-945

[学会発表](計14件)

Yamamoto, M., & Oka, T., Individual differences in paradoxical effects on stereotype suppression: Cognitive

complexity in person perception, The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, February 26, 2015, Long Beach, California, USA

山本真菜・岡隆、認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的效果との関係、*日本社会心理学会第55回大会*、2014年7月26日、北海道大学

勝谷紀子・岡隆・坂本真土、「新型うつ」のしろうと理論(3) 社会人を対象とした検討、*日本社会心理学会第55回大会*、2014年7月26日、北海道大学

Yamamoto, M., & Oka, T., The relationship between cognitive complexity and paradoxical effects in stereotype suppression., The 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, February 13, 2014, Austine, Texas, USA

勝谷紀子・岡隆・坂本真土、「新型うつ」のしろうと理論(2) 社会人を対象とした検討、*日本社会心理学会第54回大会*、2013年11月2日、沖縄国際大学

山本真菜・岡隆、認知的複雑性と集団のサブタイプとの関係、*日本社会心理学会第54回大会*、2013年11月2日、沖縄国際大学

朝川明男・岡隆、ステレオタイプ情報による能力制限の知覚の有無が数学成績に及ぼす影響、*日本社会心理学会第54回大会*、2013年11月2日、沖縄国際大学

勝谷紀子・岡隆・坂本真土、「新型うつ」のしろうと理論:大学生を対象としたテキストマイニングによる分析、*日本心理学会第77回大会*、2013年9月19日、北海道医療大学

山本真菜・岡隆、認知的複雑性とステレオタイプ抑制による逆説的效果との関係、*日本心理学会第77回大会*、2013年9月19日、北海道医療大学

Yamamoto, M., & Oka, T., The relationship between the formation of subtypes and paradoxical effects in stereotype suppression, The 14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, January 27, 2013, New Orleans, Louisiana, USA

Asakawa, A., & Oka, T., The effect of gender stereotype activation on negotiation performance in Japan, The 14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, January 27, 2013, New Orleans, Louisiana, USA

勝谷紀子・岡隆・坂本真土、うつ病についての関心の推移(2):Yahoo!知恵袋の質問データの分析、*日本社会心理学会第53回大会*、2012年11月17日、筑波大学

山本真菜・岡隆、サブタイプの確立度とステレオタイプ抑制による逆説的效果との関係、日本心理学会第76回大会、2012年9月11日、専修大学

〔図書〕(計3件)

岡隆、富山房インターナショナル、宮原琢磨(編)、21世紀の学問方法論、実証的研究における研究者と参加者の不完全な会話：研究者のステレオタイプの認知と会話の格率違反の問題を中心にして、2013、277-294

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡 隆 (OKA, Takashi)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：80203959

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし